

公開講演会発表要旨

7世紀における同範軒瓦について　まず、比較的遠距離に位置する豊浦寺と隼上り窯、四天王寺と楠枝窯、法隆寺若草伽藍と北野廃寺(幡枝窯)相互の同範瓦の年代を述べる。隼上り窯・楠葉窯・幡枝窯では飛鳥Ⅰ後半の須恵器が出土するが、隼上り窯では飛鳥Ⅱの須恵器が圧倒的に多い。坂田寺の池SG100からは飛鳥Ⅱの須恵器と有子葉単弁軒丸瓦(坂田Ⅱ)が出土しているから、飛鳥Ⅰ後半の須恵器を出土する幡枝・楠葉・隼上り窯を7世紀初頭に位置づけることは困難で、やや年代を降らせる必要があるだろう。つぎに、大和盆地北部の近接する地の同範瓦は中臣氏との関連を想定させる。年代は豊浦寺や北野廃寺に近く、仏教を排斥する立場として書紀に描かれる中臣氏だが、早くから寺院を造立したのであろう。(山崎信二)

高句麗の都城　高句麗第三番目の都城は平壤に置かれた。史料によると平壤においてはさらに「平壤城」から「長安城」へ遷都したという。近年の発掘で大規模な建築群が検出された安鶴宮遺跡は重要な問題を内包している。安鶴宮を初期の「平壤城」(427~586年)の都城遺跡とする報告書の見解とは異なり、その創建は7世紀後半を大幅には遡らないと私はみる。従って安鶴宮は後期の「長安城」(586~668年)に関連する遺跡であり、また初期の「平壤城」は安鶴宮の下層に求められる可能性がある。とはいえ創建から廃絶に至る遺跡自体の理解に困難な点も多く、高句麗都城の構造、変遷を論ずるには、瓦の年代をはじめ、なお基礎的な研究を待たねばならない。(千田剛道)

飛鳥の氏寺——山田寺を中心に——　飛鳥地域の氏寺の中で、山田寺がどのような諸特徴を有しているかを解明するため、山田寺の発掘成果と他の氏寺との比較検討を試みた。立地・伽藍配置・軒瓦等の諸要素を総合すると、飛鳥の氏寺は、官寺志向型と、それより形態などで見劣りするが個性的で独自性を持つ型とに分かれる。前者には、飛鳥寺型と山田寺のような類型とがあり、山田寺は飛鳥寺に次ぐ第一級の寺院として位置づけられる。山田寺で採用された瓦当文様や礎石の蓮華文様などの新しい要素には、唐・新羅の影響が考えられる。伽藍の変遷の分析にあたっては、回廊と他の堂塔との位置関係を重視した。(岩本正二)

古代庭園の植栽について　庭園に植えられた植物は、庭園を構成する他の要素、地形、地割り、石組、建物などと同様に庭園景観を形作る重要な要素である。近年、古代庭園の発掘調査例が増えつつある。そうした庭園にどのような植物が好んで植えられていたかを検討するため「万葉集」と「懐風藻」にあらわれた庭園植物を抽出するとともに、古代庭園遺跡の池の堆積土から発見された植物遺体、花粉などを分析した。それによると、マツ・ウメ・モモ・ヤナギ・サクラ・モミジ・ツバキ・センダン・スモモ・ツツジなどが顕著であり、これらの樹種から奈良時代の庭園植栽の特色として、①高木が少なく、中・藻木が多い、②常緑樹・針葉樹が比較的少なく、落葉広葉樹が多い、③全体的に見ると、現代でも庭園に植えられている植物がすでに奈良時代から用いられている、ことなどが指摘できる。(高瀬要一)